黄帝内経素問・王冰序

『黄帝内経』は、普通は「こうていだいけい」と呼んでいます。本当は『黄帝内経』というのは使わないほうがいいです。というのは、『黄帝内経素問』あるいは『黄帝内経霊枢経』というようになったのは、いまから１７００年前、晋の皇甫謐という人が『鍼灸甲乙経』という本をまとめたころからです。どういう本かといいますと、そのころに皇甫謐が見ていた『素問』と、それから『鍼経』（いまの『霊枢』）と、『明堂経』（経穴学の本、日本の仁和寺などにわずかに第１巻だけが残っている。編者注：『鍼灸甲乙経』の類纂に用いられた『明堂経』と、仁和寺などに現存する『明堂経』が同じかどうかには、議論の余地が有る。）の３つの本を類纂したものです。類纂とは分類し編纂することです。『素問』『霊枢』『明堂経』をバラバラにして、皇甫謐の編集方針にもとづいて、あらためて陰陽に関係する論、経穴に関する論、経脈についての説というように分類して、一まとめに編纂したものです。

その皇甫謐の序文に「黄帝内経十八巻」とあります。この序文は、本当に皇甫謐が書いたのかどうかわかりません。後の人が、皇甫謐の序だとして付け加えたのかもしれません。そういう説もあります。

ＡＤ７９年、後漢の時代になりますが、『漢書』芸文志というのが成立します。班固という大学者がまとめたことになっています。これはどういう資料かと言いますと、前漢の宮廷の図書館にあった本の目録と解説です。日本で言えば、いまの宮内庁書陵部のようなものですね。そこにあった本の目録集ですが、それは劉向という前漢末の学者がまとめた『七略』という資料を、ほぼそのまま参考にしています。

『漢書』芸文志に「医経」、つまり医学に関係する本の書名が載っています。そこに「黄帝内経十八巻」と書いてあります。それから「黄帝外経」、「内経」に対しての「外経」ですが、「黄帝外経三十七巻」というのもあります。ほかに、「扁鵲内経」が９巻、「扁鵲外経」が１２巻、「白氏内経」が３８巻、「白氏外経」が３６巻というような本がありました。書名と巻数だけがそこに記録されていて、ＡＤ７９年に『漢書』芸文志を編纂したときには、これらの書物はもうなくなっていますから、その内容は一切わかりません。最近中国では、貴重な古い書物が次々と発掘されて、竹簡や木簡や、絹に書いた帛書というものが出土していますから、そのうちどこかから、これらの本もあるいは出てくるかも知れませんけれど、出てきたらこれは大事件ですね。

ともかく無い。そのあと、皇甫謐が『黄帝三部鍼灸甲乙経』（『甲乙経』と略称する）を作ったのが２５６年、三国の時代です。それまで、約１８０年ぐらい「黄帝内経十八巻」は無くなって、どういう内容か全くわからない、そういう状況だったんですが、皇甫謐が『甲乙経』を編纂したときに、私が『甲乙経』を編纂するのに使った『素問』が９巻あるし、『九巻』という名前の本がある、と序文でいっています。『九巻』は現行の『霊枢』と内容が良く似ています。ほとんど一致していると思いますが。現行『霊枢』と内容の同じ本がそのころ『九巻』と呼ばれていたようです。『素問』９巻と『九巻』で、２×９＝１８、これがなくなったといわれる「黄帝内経十八巻」に相当する、ということを序文に書いています。

それ以来、すでに１７００年になりますけど、『素問』は『黄帝内経』を構成する一方の柱、『霊枢』も『黄帝内経』を構成する一方の柱、というふうに『素問』と『霊枢』は『黄帝内経』を構成する２書であるという説が続いているわけです。ですからこれが通説です。『黄帝内経素問』、『黄帝内経霊枢』と呼んできているので、これを変えると混乱するので、この講座でもそういう呼び方をします。

ただし、私の師匠の丸山昌朗先生が発表された研究成果を『鍼灸医学と古典の研究』という論文

集にまとめて大阪の創元社から１２年ほど前に出したんですけれど（１９７７年刊）、その中に「素問の成立を論じる」と「霊枢の成立を論じる」という論文があります。そこで、『霊枢』と『素問』というのは、皇甫謐の序文以来、『黄帝内経』を構成する２書であると言われているけれど、これはおかしい。『素問』と『霊枢』の中身をよく読んでみると、全く違う時代に、違うグループが編纂したとしか考えられないような内容である。この二つの、矛盾した二つの本が、一つの『黄帝内経』を構成している、というのはこれはおかしい。したがって『黄帝内経』という本が確かに『漢書』芸文志に記録されているように、前漢の時代には存在していたのは確かで、そのほかに『素問』という本があって、『九巻』という本があって、この三つはそれぞれ違う系統の違うグループの、違う時代に編纂された本である、このようにみないと矛盾が解決つかない。そういう立場をとられました。

これは非常に重要な立場なんです。というのは、『素問』はずいぶんと矛盾があるんです。『素問』の、全８１篇になっていますけれど、各論篇は、中国医学史の発展過程を見てみると、少なくとも４００～５００年間、少し多めに見ると６００～７００年間の、前漢・後漢を中心とした医学論文集ってことになるんですね。ですから、戦国末期から秦漢の頃、紀元前２００～３００年の頃に論じられた医学内容と、後漢も過ぎて六朝の頃に論じられた内容とは、５００～６００年の期間があるわけで、その間に医療の技術も変わってくるでしょうし、医学理論も発展してくるでしょうから、ずいぶんと変化しているわけです。それをひとつの『素問』という中に収めているので、その矛盾は大きいわけです。矛盾があまりにあって、いくら読んでも矛盾だらけでしようがない、そう言った日本の古方家の偉い学者もいます。でもその人たちは『素問』を歴史的な目で見ない、歴史的な発展として見ないから、その中で混乱していて、矛盾しているから、役にたたないと言っているにすぎないです。ですから丸山先生のように、『素問』や『霊枢』のそれぞれの論篇をきちんと、出来ればきちんと整理して、年代別に整理するわけにいきませんけれど、歴史的な発展過程で、この論篇はどのような時期にどのようなものを引き継いで発展させたんだ、その論篇を参考にしながら更に発展したんじゃないか、というような見方が『素問』や『霊枢』を読む上では非常に重要です。

そのことを明確にするためには、『黄帝内経』と『素問』と『霊枢』とはそれぞれ別本である、別々の人たちが、異なる時代に編纂してたものだと言い切ったほうが、明確に物事を整理する立場が取れるわけです。このような意味で、最初にそのことを申し上げたいと思います。

ですから、この講座で、『内経』を『素問』と『霊枢』を含んだもの、という意味で使うのは、１７００年間もの間の習慣を急に変えると、混乱する恐れが有るからです。

漢代を中心とした医学・医療はどのような背景をもって成立してきたのだろうか。どんな医学でも、ドイツの医学でも、イギリスの医学でも、アメリカの医学でも、あるいはベトナムの医学でも、インドの医学でも、それぞれの民族が長い歴史を経て、それぞれの医療を組み立て、医療の中から医学を構築してくることを、この数千年の間に人類はずっと集大成してきている。

それぞれに特徴のある医学をつくってきています。中国の医学、いまにいたる中国系医学の基本的なバックボーンは何か、一言でいえば気と陰陽思想です。気を中心とする陰陽思想と言っていいと思います。それをもたらしたのは、基本的にはやはり中国の、中国大陸の地球上における位置です。北半球にあって、広大な豊かな土地があって、そこにおそらく２０万年ぐらい前から人類が住みつき、住みつきながら土地を耕し、作物をいただいて生きてきた。定着農耕に適した地域ということが一つの重要な条件です。それから北半球にあることも重要な条件です。しかもインドなどとも違う。あるいはギリシャ医学が出来上がった地域とも違う。エジプトとも違う。どこが違うかというと、四季がはっきりしていることです。春夏秋冬というきわめて明確な一年間の季節変化をもっている地域です。四季が中心になっているということが、中国系医学を作る上でもってもっとも基本的な条件といえます。定着して農耕をする上でもって一番大事な条件は、芽が出るための適当

な暖かさ、適当な水分です。要するに、天から太陽が適当な時期に適当な量の光と温度を降り注いでくれるっていうことと、地面は適当な水分をもっているということ。これを、天の陽気と地の陰気という言い方をします。天の気と地の気のいい条件の中で、そこに生命を宿らせることが出来る、育むことが出来る、という土地条件ですね。これがあって初めて気、あるいは陰陽思想といういうものが、だんだんだんだん醸成されてきたんだろう。いまでは、陰とか陽とかについて、頭の中でことばでもって理解しようとしますけれど、元々はですね、どんなことを中身につかまえながら言っているかっていえば、それは太陽が照っているとか地面が凍っているとか、暖かいとか寒いとか、明るいとか暗いとかってことを、陰とか陽とかっていうことばで総合してくる。で、そういう陰陽思想としてまとめられてきたのは、そんなに古くはないんですね。どんなに古くても多分せいぜい６０００～７０００年ぐらいだと思いますね。で、そういう中国の土地条件の中から、目に見えるものは目に見えないものが生み出してくる。形あるものは形ないものから生ずる、という見方、これがずいぶんと中心的な見方になっている。

　そういうことを思想としてまとめて表現したのは、非常に好きな言葉ですけど、『荘子』外篇「知北遊」という篇に、「人の生は気の集まりなり」という言い方があるんですね。人の生命は気の集まりであり、「気が集まれば生じ、気が散ずれば死す」という有名な一条があるんです。これは中国医学を成立させてきた基本的なテーゼなんです。『荘子』はいつ頃できたかというと、正確なことはたぶんまだわかっていないんだろうと思いますが、ＢＣ２８０年ぐらいのころ、戦国末期に近いころに、荘子が老子から受け継いだところの思想をまとめたものと言われています。この老子や荘子たちによって形成されてきた気の思想というのが、ＢＣ２４０年に、強大な秦帝国がつくられる少し前に、秦の宰相をやっていたと呂不韋がまとめたっていうことになっている『呂氏春秋』に受け継がれています。戦国末期の百科全書です。『呂氏春秋』にいくつか医学に関係する篇があります。たとえば「達鬱」、鬱滞を伸び伸びとさせるという意味の篇があります。その中に、気が鬱滞すると病気になるんだ、というようなことが書かれています。気の流れがどこかでとどこってしまうと、そうするとそこに病気をおこす。たとえば、目にいくべき気がそこで鬱滞すると目の病気をおこす。あるいは耳にいくべき、流れているべき気がそこで鬱滞すれば耳の病気をおこす。その基本は、「流水は腐らず、戸枢は螻せず」です。枢は戸のしんばり、軸になっています。要するに、流れている水は腐らないし、戸の軸になっているところ、枢軸のところ、そこが「螻せず」、つまり虫食いにならない。なぜかというと、「動けばなり」が基本です。人間の身体も同じで、身体が動かないと中で気が鬱滞して病気をおこす。これが病気の基本であるっていう考え方が、『呂氏春秋』の「達鬱」に書いてあります。

　これはいまから見れば、経絡説、全身に気が運行することによって生命を維持するっていう経絡説、この考え方を貫いて出来あがってきた鍼灸医学、それを生み出すための思想的なバックっていうことになります。『呂氏春秋』に、ＢＣ２３０年ぐらいの、戦国末期にそういう考え方ができたといっても、経絡説が『呂氏春秋』以前に生まれたとはどうしてもとれません。歴史的にいえば、『呂氏春秋』以降、『呂氏春秋』などによって発展してきた精気思想が気の流通が病気に関係する、ということをいっているわけですから、そういうバックでそういう目で全身を診るということが形成されたわけです。そういう見方で鍼をし、そういう見方でお灸をし、そういう見方で病気をみると、なるほど人間の身体というのは、いくつかの気が運行しているルートがあるんじゃないか。そのルートがうまく流れれば病気はしないし、そのルートがうまく流れない、気が鬱滞すると病気を起こすんだ、という見方にしたがって経絡説は出来てきます。経絡説っていうのは、やっぱりそのあとです。『呂氏春秋』などの思想的なバックが出来あがったあとに、発見され、鍛えられてきた説だと思います。

　そのあとに、ＢＣ１６８年の、前漢の文帝のころの、『馬王堆医経』というのがあります。２０年ほど前（１９７３年頃）になりますけど、中国の湖南省の長沙市に、古くから馬王の墳墓だとい

われてきた山があって、これを馬王の堆といっていましたが、これは馬王の堆ではなく、長沙に派遣されていた軑侯（だいこう）と夫人と息子の三人のお墓でした。息子の墓は第３号墓になりますが、これを開けてみたらたくさん本が出てきました。本といっても、竹簡とか、木簡、帛書です。帛書というのは絹に書いた本です。普通は本にするということは、主として竹簡に一行ずっと文字を書いて、それを数十本まとめて巻物にしていました。そういう本が主流だった中で、非常に貴重な絹、白絹に本を書くというのは、より貴重なものを残そうっていうことだったと思います。ですから、帛書に書かれた内容はすごく重要なものが残っています。老子の『道徳経』とか、有用な医学に関係する本とかです。

２１００年以上前に、軑侯の息子が亡くなった時に、生前に使っていた物を一緒に埋葬しました。副葬品として。死んでからも病気にならないように薬を入れたり、死んでからも困ったらすぐお灸するようにお灸の本を入れたり。その中に、『陰陽十一脈灸経』とか『足臂十一脈灸経』といわれている、経脈に関する内容が帛書に書かれていました。

その内容は、思想的な背景の中で、気の観点で人間の身体を見ようとし、そうしたら見えてきたという、その経絡説のごく初期の姿が書かれているんです。のちになって『霊枢』経脈篇に初めて体系的にまとめられた経絡説の祖型といわれているものです。経脈篇には、初めて肺手太陰の脈とかいうような名前をつけて、現行の肺経とかいわれる経脉の流れ方や、どういう病気と関係があり、どういうふうに治療すればいいのか、そんなことが書いてある。そのもとになったのが帛書の中の『陰陽十一脈灸経』や『足臂十一脈灸経』で、１１の経脉の流注と、関係する病証、経脈病証と、若干の治療方法が書かれている。

これには経脈の数は１１しかありませんし、流注も手足の末端については触れていませんし、それから蔵府との関連はわずか５つの経脉にしか書かれていませんし、関係する病気も非常に少ない。『霊枢』経脈篇と比べればはるかに幼稚、いいかえれば素朴な姿、素朴な経絡説しか書いてありません。それにしてもこのような経絡説の祖型が、ＢＣ１６８年に埋葬されたのです。

実際にこの本の中身は、書いてある文字からいえば、篆書から隷書に変わる時期の書体が使われているから、秦から漢に移行する時期に相当します。始皇帝によって統一された秦帝国が出来上がって、小篆という統一文字をつくった。小篆という文字は非常に書きにくい文字なんです。ぐにゃぐにゃしてますからね。これをもっと書き易い書体にしようとして隷書になっていくんです。ですから、秦帝国からＢＣ２０２年に漢帝国が作られるまでの約２０年間ぐらいの間に書き写されたものだろうということが、中国の書家たちの研究によってわかってきている。

そうすると『呂氏春秋』が書かれたＢＣ２３０～２４０年ぐらいから、１０年、１５年、２０年と経っています。そのころに、そういう目で、そういう思想を背景にして、人体を見たら、人体の中に経脈の祖型が見つかって、それを医療に使った。ここにお灸をすればその経脈に関係する病気を治せる、という経脈説の初歩的な姿が明らかになりました。

この時期の、この段階の、同時代的な医学内容、医療内容を考える、考証する方法がもう一つあります。それは中国の最初の歴史書である司馬遷が書いた『史記』です。非常に重要な資料です。ＢＣ９２年に成立したことになってます。前漢の武帝のころに、武帝に仕えていながら武帝から宮刑に処せられた、その司馬遷が屈折した気持ちを、歴史書を著すことに情熱をそそいだ。その『史記』の中の列伝に中国の古代の名医といわれている２人の名医の伝記が書いてあります。列伝とは、どうしても残しておきたい人物伝ですが、１０５人の伝があります。その中に扁鵲と倉公淳于意の２人の医家の伝が書かれています。扁鵲は、ＢＣ４００～５００年ぐらいの名医ということになっていますけれど、中を読みますと一人の人物、一人の扁鵲という人物の伝記ではなさそうです。扁鵲（ヘンジャク、かささぎ）という名前をトーテムとしていた医療集団の、全体としての医療成果、医学における成果をまとめたものというふうに考えられます。ところが倉公淳于意はＢＣ２１５年に生まれ、ＢＣ１８０年に淳于意は３５歳である。これは『史記』のその他の年表などか

ら推測するとほぼ正しい。つまりＢＣ１６８年に埋葬された馬王堆の医経、医学書の少し前に、倉公淳于意という名医は活躍していたのです。だからほぼ同時代なのです。倉公淳于意のカルテが、この『史記』の扁鵲倉公列伝の中に２５例残っています。これは倉公が、ほかの人から讒言をされて罪を着せられそうになったときに、皇帝の諮問に対して、私はどこそこのね皇太子をこういうふうにして治したとかね、どこそこの困った人をこんなふうにして診て、こういう診断して、こういう脈をみてねこういう診断したらね、こうだと思ってここに鍼をやったら治った、というようなことを２５のカルテでもって上奏し、皇帝に答申して、それによって罰を受けないですんだわけです。【編者注：淳于意が誣告されたのはＢＣ１７６、その少女の上書に感動して文帝が肉刑を除いたのはＢＣ１６７、斉が六王国に分割されたのはＢＣ１６４。淳于意のカルテには、斉の六王国関係のものが多く、したがって釈放されてからのほうがむしろ医者としての活躍は華々しいわけであるし、皇帝から下問が有ったのはさらにその後のはずである。】そういう記録が、司馬遷によって『史記』の中に残されたわけです。ほぼ同時代の馬王堆、それにくらべると倉公の医学、医療内容がはるかに優れています。馬王堆医経には脈診はあまりない。ほとんど書かれていないです。倉公はどういう病気でも必ず脈をみているんです。それによって診断を決定して治療をしている。薬はこの薬を使う。お灸はここにやる。

ところが、『素問』の中に展開されている医学内容と、馬王堆医経の医学内容と、いまの『史記』扁鵲倉公列伝に書いてある医学の内容とを比較してみると、『史記』も『馬王堆』も『素問』よりも古い。『素問』中にはこの二つよりも古いような内容はほとんどないといっていいと思います。つまり『素問』の成立は、前漢の初期のこれらの時期よりもおくれている。

医学に関係する重要な資料としてもう少しあげれば、『淮南子』があります。ＢＣ１３９年、淮南王の劉安が『淮南子』を献上しました。淮南に派遣された高祖劉邦の孫です。その劉安が、たぶん暇だったんだと思いますけれど、中央から大分離れている南方の淮南に派遣され、暇だったので学者どもをいっぱい集めて、タダ飯食わして、本を編纂して『淮南子』という名前をつけて、武帝に献上しています。本にまとめて中央に献上すれば少しは偉くなれるかなという、そんな下心があったかどうかわかりませんけど。『淮南子』は、これは道家の系統に属する本ですけれども、やはりこのころの、百科事典的に非常に幅の広い内容をもっています。この中に「気」という字を使った用語が急速に増えています。

『呂氏春秋』や、あるいはさっきふれた馬王堆医経の中に、「気」という文字がどのくらいあるかということを調べたことがあるんですが、あまりないんです。「気」「陰陽思想」というふうにいっていますけれども、馬王堆医経までの段階では「気」というのはあんまりない。たとえば『論語』、これはまあ現存する資料の中では比較的古いほうの資料ですね。『論語』がいつごろ出来たかっていうと、ＢＣ４５０年とかいわれます。そのあとに加わっているので正確な年代はわかりませんけれど。比較的古い時代の本とみても、「気」という文字を使った語が３つしかありません。「辞気」、言葉の気迫。それから「血気」。それから「食気」、食い気。この３つしかありません。馬王堆医経でも１０幾つぐらいしかないです。それが『淮南子』になりますと１６０幾つの「気」を使った用語が出来上がってきてる。つまり、「気」「経絡」というものを中心の柱にした医学が成立するには、「気」についての観察が非常に詳細に出来上がってくるという背景が必要です。そういう意味では『淮南子』は素問系の医学を形成する上で重要な役割をしています。ある人は、『素問』は淮南王劉安が書いたものだと言う人もあるくらいに、淮南王劉安が編纂した『淮南子』という本は、いわゆる内経系の医学に重要な役割を果たしている、と思います。

続けて『素問』の成立に関わる資料を、もう少しお話しておきます。ＢＣ１０４年、漢の武帝が太初暦を制定した。重要な政変、革命があると、その革命政権は、自分の正当性を後世まで確立したいということで新たな暦をつくる、制定する、というのがよくあります。このころまでに漢帝国

が非常に強固になってきましたから、武帝は暦を制定しました。この太初暦の制定には、『史記』を編纂した司馬遷なども関与しています。司馬遷は重要な仕事の一翼を担っています。

この太初暦の制定は、『素問』脈解篇に関係があります。脈解篇はどのような内容かといいますと、経脈についての解説です。経脈を逆に言えば「脈経」であり、そのころにいまの王叔和の『脈経』ではない「脈経」、「古脈経」があって、「古脈経」が当時、内容がよくわからないという医者が増えたので、彼らのために、「脈経」を解説する篇が『素問』の中に組み入れてあります。その冒頭に「太陽は寅なり」とある。これは太初暦ではじめて固まった考え方です。ですからこの脈解篇は、太初暦採用以降、ですからＢＣ１０４年以降にできたということになります。いいかえれば脈解篇の上限がＢＣ１０４年ということになります。

『素問』脈解篇は、この講座でもそのうち出てきますが、『素問』全体のなかでは比較的古い篇です。荻生徂徠という人が『素問評』を著したのですが、その中で脈解篇は最も古い篇であろうと言っています。『素問』の中で比較的古い方の篇でもＢＣ１０４年以降と実証されています。

もう少しお話を進めますと、７９年に白虎観で五経を校定して、班固が『白虎通』という本にまとめました。あの白虎観というところはですね、これは道教のお寺です。後漢の、帝国がほぼ安定してきてですね、学問をですね、振興させる、そういうまあいい時期にきたんじゃないですかね、その頃にですね、後漢の章帝がですね、どうもその、五行についてですね、重要な食い違いが世の中にある、その食い違いを討論させて、全国シンポジウムを開こう、ということでですね、白虎観にですね、学者どもをたくさん集めましてね。たぶん１日や２日じゃなくてですね、数十日ぐらいだと思いますけどね、大シンポジウムを開いて、それをまとめたのがですね、『漢書芸文志』を著した班固という学者です。班固という学者が、『白虎通』あるいは『白虎通議』という名前のですね、本にまとめたんです。この『白虎通議』の中に、例えば五行について言えば、五行と五蔵との関係。いま私たちが普通いっているようにね、木が肝で、金が肺でね、心が火でというね、木火土金水を肝心脾肺腎にわるといっていますね。そういう五行と五蔵との関連は、それまで全然バラバラだったんですね。バラバラだったんですよ。あの秋が肝でですね、肺が冬であるといった説もあったりですね、いろんな説があって、それを統一してですね、五行と五蔵の関係などについても統一見解をつくって、現行のようになったのがこの『白虎通議』なんですね。ＡＤ７９年編纂ということになってます。したがって、現在の『素問』や『霊枢』、もちろん『難経』も含めて、五行説で体系化するための基礎的な材料ですね、これはここら以降からひろがったと、こういうふうに言っていいんじゃないかと思いますね。

で、いろんな材料が最近もたくさんありまして、ある古典が歴史的にいつごろのもの、とかいう材料がたくさん出てきました。例えばですね、『難経』はＡＤ１９０年である、と。幕末の考証学派・多紀元簡の息子の元胤が『医籍考』の中でもってそれを言っているわけです。いまの『難経』には、著者の名前がくっついてるんわけですね。どういう名前かっていうと、秦越人ですね。秦越人扁鵲著難経というふうになっているのは、これは『隋書経籍志』以降なんですね。それなのに、『難経』には扁鵲という名前がくっついているから、『難経』は扁鵲という人が書いたもので、春秋末期から戦国期ぐらい、孔子とほぼ同じくらいに成立したものであるという、こんなこといまだにそう言っている人があるんですけれどもね。そういうことを明確にね、否定した最初の人がいま言った多紀元胤ですね。そういう実証的な研究方法ていうのは中国でもやっと最近ね、影響しはじめたんです。中国人というのはだいたいね、自分の国の文物が、世界に冠たる物で最も古いっていうことをやっぱり言いたがるんですね。それはそうですね、日本だってバカバカしいことを言いますもんね。でも中国では特にそういう傾向があって、『素問』は戦国の中期ぐらいに出来たもんだとか、『難経』は扁鵲が書いたんだからほぼそれよりも少し前だ、とかね。いまだにまあそういうことを言っている偉い学者もたくさんいるんです。けれども、だんだんそういうことをね、もっと実証的にね、決めなきゃならんっていう材料がいっぱい出てきちゃったんです。さっき言った『馬

王堆』の医経だとかいろんなものが出てきちゃってね。最近は、例えばですね、李いま庸は１０６年説です。李いま庸さんっていうのは湖北中医学院の教授です。まだお会いしたことないんですけれども、中国での内経研究の第一人者の一人だと思います。『読古医書随筆』という薄い本があります。そこに『難経』の成立について小論があるんです。昔はですね、諱を避けるということがあって、皇帝の諱を避けないと首切られちゃうんですね。だからそういう目でみると、後漢の、確か章帝だったかの諱を『難経』は避けているから、それ以降である。章帝の前に書かれたんだったらね、章帝が使っていた名前をね、避けなくてもいいわけでしょ。それを避けているっていうことは、それ以降に『難経』は編纂されたんだっていう。そういうものも材料にしてね、いくつか材料を重ねてきて『難経』は１０６年であるって、こういっているんですね。まあこれはなかなか敬聴に値する説です。そうすると『難経』というのは明らかに、『素問』や『霊枢』を、その中で展開されている論を、『難経』流にさらに発展したり、改変したりして、組み立てている、そういう本だと私は思いますので、もし『難経』がＡＤ１０６年説だったら、少なくとも『素問』はですね、ＢＣ１０４年以降ＡＤ１０６年まで、約２００年間となりますね。その間に主要な部分が編纂されている。『霊枢』は『素問』よりも少しおくれている時期、というようにも考えられますので、ＡＤ１００年前後ぐらいか。

それから、白虎観会議の『白虎通議』がＡＤ７９年というふうなことを考えると、紀元後７９年以降１０６年までの２７年間ですね。そのくらいの期間に『素問』とか『霊枢』とか『難経』とかという、現在日本で三大古典といわれている本の主要な部分が編纂されたんじゃないか、というふうにまあ、一応の歴史的な時期推定をしています。一年とか二年とかってのはやっぱりね、あの頃でも重要な年数だと思いますね。あそこでもってこういう本を出してね、それを中心にして臨床集団が出来上がってですね、その臨床集団の中でもって次々と新しい論が展開されている、っていうことはね、すぐ翌日いまの日本のようにＦＡＸでもって全国にね、送られるわけではありませんけれど、やっぱり重要な医療内容というのは、効果があって優秀ならばですね、伝わっていきますね。非常に速く伝わっていきますね。だから一年、二年、三年っていうような時期に、相互に論を戦わせるなんてことがね、たぶんあったんじゃないかと思いますね。そういう目でみると、『素問』と『霊枢』の内容はですね、ＡＤ１００年ぐらいをですね、前後して、論を戦わしているという感じが非常にするわけです。これはまた後でもって触れようと思いますけれど。

そういう内経、『素問』『霊枢』の成立について、いままで日本でもずいぶん優れた論が出ています。さっき言った荻生徂徠の『素問評』とかですね、元簡の『素問識』。「そもんし」と呼んでいます。そういう読みのならわしも癖がありますから、「そもんしき」と読むと、あれはアマチュアだなと思われます。多紀元簡の『素問識』の解題、元胤の『医籍考』、それから岡西為人さんの『宋以前医籍考』。

後でゆっくり自分で読んでみてください。『素問識』を持っていれば解題を読む。『素問』という名称の由来とかもね、そこに書いてあります。あるいは郭靄春さんの『黄帝内経素問校注語釈』という本をですね、早急に手に入れて、郭靄春さんが序文の中で、『素問』の成立についてどういうふうに言っているのか、とかですね。そういうことをなるべくご自分で読むようにしていただきたい。

『素問』という名前にはですね、大きくいえば２つの説がある。１つは平素問答の書。黄帝という伝説的な帝王とですね、その臣下の医者、主として岐伯、そのほか伯高とか雷公とか、何人かいるんですけれども、その医療集団、医者集団達と問答をしてですね、重要な医学医療に関して世に残そうとした、というまあ、そういう記録であるという説が一つですね。これは馬玄台とか呉崑とか張介賓とか、それらの人が言っていることですね。

それからそれに対して、林億の説。林億はどういう人かといいますと、嘉祐元年（１０５６）に『素問』などを校正した。『重広補註黄帝内経素問』の、最初のほうに、重広補註黄帝内経素問序

とありますね。素問表と書いてある本もある。表というのはたてまつる。皇帝の勅命でもって、宋の仁宗ですね、仁宗の勅命でもって大学者の林億とか高保衡という人達がですね、重要な医学書について、校訂作業にかかるわけです。校正するっていいますね。論文を書いて印刷をまわすと活字をくんでね、一回二回三回と校正をして、文字の間違いをただす。そういうことをやって、印刷されて、みんなに同じものがわたる。それぞれが違っているわけがない。ところが昔は手抄本で、全部手で書き写していた。一冊借りてきてですね、何十日も何百日もかけて本や、竹簡なり木簡なりを書き写させてもらう。そして、その本からまたお弟子さんが書き写させてもらう。ということを、ずーっと繰り返してくるから、必ずね、間違いがおきるんです。その間違いを４種類にわけて、衍誤脱倒と言っています。便利ですよね中国の言葉ってね。衍誤脱倒４字でもって、全部間違い方を言っちゃってるんですから。衍は余分な文字が入り込む。誤は字を間違って書いてしまう。脱は文字が何字とか何十字とか抜け落ちてしまう。倒は文字の順番が入れ違っちゃう。竹簡なり木簡なり、１簡に何十字か、大体２２～２３字ですかね、書いてヒモでまとめて巻物にして、一巻ですね。巻くから一巻ですね。そういうふうにやっていたのが、そのヒモが腐ったりなんかして、ほどけちゃうんですね。書庫から引っ張り出したら、何十本の簡がバラバラになっちゃって、一本抜け落ちてどこかへいっちゃったとかね。これが脱簡。それからバラバラになったのをですね、さてどう並べたらいいのかっていうクイズですね。入れ違っちゃった、順番が間違っちゃった、倒錯しちゃった。これが錯簡。何字かをうっかり書き漏らした。脱字ですね。何字かをひっくり返して書いちゃうこともある。これも倒ですね。そういうことがいっぱいあるんです。そういうことがいっぱいあるのを次々と書き写していくわけですから、時代が下るにしたがって、もう全く異なった本になっちゃうくらい違うんですね。そういうことでは正しく医学医療が伝わっていかないから、子孫に間違ったことを残したら大変だっていうんで、宋代にですね、仁宗が勅命でもって学者を集めて、異本を全部集めて校正しなさい、といってやったのが１０５６年です。

『素問』についてはですね、いまの林億らの素問序の次に、「重広補註黄帝内経素問序　啓玄子王冰撰」とありますね。宋代に校正するもとになった『素問』がそれだったんですね。王冰次注本と呼んでいる本です。唐の代宋の宝応元年（７６２）に、王冰という人が、『素問』を編次しなおして注釈を施した。それは宋代に林億らが新校正するより大分前ですね、約３００年前。

現在私たちがこうやって、いま見ている『黄帝内経素問』というのは、元々はこの王冰という人が唐代に次注した本がもとになっているんです。その前の『素問』はどうだったのかっていうと、南北朝の頃の医学者であった全元起という人が、その頃にあった『黄帝素問』という本に注釈をしているんですね。これも、ひょっとしたら注釈だけではなくて、王冰と同じように、編次しているのかも知れない。これはもう何とも言えませんね。

全元起という人が注釈していたその頃の『素問』というのは、いまはどこにも残っていません。全元起注本『素問』、『素問訓解』という名前でもって呼んでいますけれども、その本はいまはどこにもありません。あるいはひょっとしてどっかから出てくるかもわかりません。出てきたら私の話してることは全部ウソだった、となるかもわからない、ていうぐらい怖いんですけどね。

それから約２６０～２７０年経って、王冰という人は、全元起という人がみていた『素問』は、いいかげんだ、バラバラでもって無茶苦茶だというんですね。それで、いろんな本を全部集めてですね、研究して、加筆訂正する、という大それた仕事をやっちゃったんですね。それが王冰次注本という本で、それからさらに２００何年か経った宋代にですね、それをテキスト、底本として、林億らが新しく校正しなおして新校正本というのをつくったんです。宋代には紙に印刷するっていう技術がすでに出来上がっていますから、この本は同じような本が幾つも残っていたんだと思います。それで明代になって顧従徳という人が、もう一回宋本をもとにして、木版に彫って印刷して残した。それが日本や中国にいくつも残っています。で、その本を縮印したのが、いくつか出版されています。宋本の『素問』というのは、いまは一つも残っていません。ただその系統の本がずっと

残っていて、私たちがテキストとして使うわけですね。
　『素問』および『霊枢』という、基本的な部分では最も初期に該当する系統的な医学書で、かつ、いまに至るも中国系の医学、日本の漢方の祖、東洋の伝統医学の規範となっている『素問』『霊枢』というのは、一体どのような経緯をもって成立していたのか、それを勉強するにはどんな必要な方法を一緒にとらなきゃならないのかというようなことをですね、引き続き触れていきたいと、こう思います。
　いま申し上げた通り、ことに『素問』というのは、戦国末期からの気、陰陽、経絡説の発展が、前漢から後漢にかけての３００年間を中心としてまとめられて成立した、そう考えられます。具体的には、『史記』扁鵲倉公列伝の中に含まれている２５のカルテを中心として、その時代の状態を考えてみますと、倉公にほぼ代表される医家集団が受け継いできて、前漢の初期には相当体系的な医学になっていた。その倉公の医学が前漢のさまざまな文化の発展の中で、より優れた医学・医療として体系化されて、それが『素問』に集約されようとしていた。そう考えるとですね、基礎医学の出発点がほぼ『素問』である。で、それをさらに鍼灸に限って、比較的にですが鍼に限って、総合的に発展させようとしたグループがあり、時代があって、それが『霊枢』、古くは『鍼経』（はりのお経ですね）とか、あるいは『九巻』といわれていたところの書物に集約されようとしていた。鍼灸医学の基礎ですね。それらは前漢・後漢のですね、中心的な医学体系を形成してきた書物で、それが結局いまの中医学に至るモデルですね。まあこれから先もですね。一種の設計図を全部書き上げてしまったと考えられますので、中国的伝統医学というのは、『素問』『霊枢』から離れることはできない。
　従って、我々が、私たち日本で鍼灸をこれからどのように発展させていくかということを考える場合でもですね、その基礎を外すわけにはいかないということになるわけです。ですから、そういう意味では、『素問』や『霊枢』を正しく読むということがどのくらい大切か、というふうに考えるわけです。
　中国では日本よりももっとたくさんの人たちがそういう努力をしてきたわけですけれども、最近の中国で問題になっているのは、３０代～４０代の、大学でいえば助教授クラスの人たちが小学校に上がる前から、簡体字を教わってきていることですね。文字は簡体字しか学校の教科書では使わないという、中国の解放後の新しい文字政策で、いわゆる繁体字、難しい古い字体をですね、読み、解釈するという力が大幅に落ちている。全体の識字能力・識字範囲は広がりましたけれども、個々の古い文字を研究するということが弱まってきている。そのために、中医学を勉強する機関、いわゆる中医学院で、十数年前から医古文基礎という科目をですね、設けている。教科書も何回か修訂されています。簡単に言えば、古代漢語で書かれている古医書を読むための基礎学ですね。それを大学に入った年にたたきこむという、そういう基礎科目ですね。
　日本では例えば鍼灸学校に入りますと、最初に、昔の漢方概論、いまは東洋医学概論っていうのをやって、概論からいきなり入って、で、概論だけで終わっちゃうわけですね。３年間もある鍼灸学校の教育の中でもって、実際にはただの１回も『素問』とか『霊枢』とかを見たことのない、名前だけは聞いているけれども、見たことはないっていう鍼灸師が大量に作られている。
　中国の方ではそうはいかないですね、やっぱりね。自国の古い文化をですね、どのように正しく受け継ぎ、発展させていく人材をつくるかっていうことが、一応中医学の教育の基本のひとつですね。そういう意味で、正しく読み、正しく解釈し、より広められる、その中のよりすぐれたものを探し出せる能力をもった人たちを育てる、という意味で最初にそういう科目をもってくる。
　いわゆる医古文基礎学っていうのはどんなことをやるかというと、最初に工具書の知識ですね。ものを作るのには工具が必要、家を建てるにはカンナが必要だし、ノコギリが必要だということで、工具書という言い方でですね。どんな工具書があるのか、それはどんな特徴があって、どんな時代にどんなものができたのかってなことをですね、系統的に教育する。日本でいえば、どんな辞

書を使ったら、これから読もうと思っている『素問』を読むのに最も適しているのかってなことをですね、勉強するわけですね。で、医学書ってのは、単に医学に関係することだけではもちろんなくてですね、歴史的な問題も入ってくる。それから例えば、よりよくわからせるために比喩を使った箇所では、その比喩にはいったいいつごろの誰が、どんな意味で言ったのかってことを知らないと正しく読めない。あるいは人物の名前が出てきても、人物の名前なのか部位の名前なのか、あるいは書名なのかがわからなかったら、それは正しくは読めない。ですから、そういう意味では辞書といっても、いわゆる文字の辞書だけではなくて、人物辞典だとか歴史辞典だとか、あるいは書名を知るための辞典だったり、そういういろんなたくさんの辞書が必要になってくる。で、それを全部分類・系統立てて教える。

日本でいま、私たちがまずとりあえず古医書を読もうと思ったら、どんな辞書をですね、買って座右に置いといたらいいだろうというと、一冊挙げれば、手頃なのは、学習研究社で出している『漢和大辞典』ですね。これは亡くなった藤堂明保さんの編。これにはどういう特徴があるかというと、一冊で、他の辞書と比べて手頃、持ち歩くには手頃じゃない、この場合は机の横にちょっと置いといて、ちょくちょく引くのに手頃。何が一番いいところかというと、音がね、昔の音が書いてある唯一の本ですね。古代から近代までの音の変遷、ひとつひとつの文字がどんな発音がされていたのかっていうことがわかるようになっている。まあ問題はあるようですけれども。音韻による文字の解釈をする上で、日本では唯一の資料といっていいかもしれない。それから手頃な解説、中国の文字学の解説が載っていますし、歴史に合わせて名著の、ほぼそれくらいは名前だけでも知っておくべきだろうという本の解説が載っていますね。それらも含めて一番手頃だろう、と。

欲をいえば、やっぱり辞書としては日本で最高峰、諸橋さんの『大漢和辞典』。これは全部で１３巻。諸橋さんの亡くなった後、大漢和辞典の修正作がさらに引き続きやっていらっしゃる米山さん【編者注：鎌田さんだったかも】をお呼びして、その辞典の修訂作業に関わるさまざまな話をしていただいたんです。『大漢和辞典』、編纂に５０年かかっているんですね。やっぱり、そういう人たちの努力を思いながらやらなきゃいけないと思いました。で、４～５年前に、いや５～６年前ですか、大改訂をされたのが出てました。さらにね、大きな文字の版で。だんだん年をとると大きな文字でなくちゃいけなくなる。お金に余裕のある方は、『大漢和辞典』（の縮刷じゃないやつ）があった方がはるかによろしいと思います。

それからもう一冊、手元に欲しいのは、中日辞典ですね。どこのがいいかってのは、まああんまり言っちゃいけない。まあ比較的絶えず修正してですね、いいものを出そうとしてる努力が見えるのは愛知大学で編纂している中日辞典。あれはいいですね。何故いま中日辞典が必要かというとですね、日本ですぐれたいい古典の研究書といわれるものが、この２０年を見てもあまりないんですね。まあ自分で言うのもあれですけれども、私の恩師がガリ版刷りでもって出した『校勘和訓黄帝素問』、『校勘和訓黄帝鍼経』、それに少し遅れて藤木君が出した、『素問』『霊枢』の研究論文集。それから、あまりいい本が出にくい。出にくい時代っていうのが多分あるんですね。出にくい時代が少し続いていて、それで、その間に中国ではですね、この２０年くらいの間に、１０年くらいですかね、『内経』に関係するいい研究書がたくさん出ている。で、日本に来てるのもあるし、来てないのもあるし、来にくいのもありますけれども、それらはもうほとんど全部簡体字でもって解説をしている。本文も簡体字になっている場合もある。つまり、簡体字に慣れながら中国から出版されている研究書を読みこなせる力がつくと、そうすると大変便利。日本でなかなか翻訳出版って出ませんですよね。出ればだいたい、向こうに行って買って多分１００円の本が、日本で翻訳に出すと１万円くらいになっちゃうんですね、だいたいね。で、向こうで買って１００円の本が、日本に来ても原書なら５００円くらいで買えるわけです。まあお金に余裕のある人はいくらでもいいんでしょうけれども、ただ翻訳を待ってなきゃならない。それよりはむしろ自分でもって、中国語、現代中国語を読めるように、話すのは大変だけど、会話は全然ダメですけど、読めるだけの

ね、力をつけておくと大変便利。便利ということは言っちゃいけないけど、大変刺激されることが多いですね。ですから、そのためにはですね、最低１冊、日中・中日辞典は持っていた方がいい。それを持っていれば、現代中国語の文法をまるっきり知らなくてもね、引けば少しは役にたつ。漢字は、こう眺めてると意味はだいたい通じてくることが多いですけれどね、やっぱりね辞書をひいてみると、全然違った解釈をしていたということがたくさんある。代表的な例が、例えば「是（これ）」。辞書をひかないでもって、ずいぶん長い間読んでいて、「是」は「これ」という意味しかないんだろうと思ってたら、そうじゃなくて、英語の「is」なんですね。「～である」という意味。で、そんなことは辞書ひかないとなかなかすぐはわかりません。ですから辞書を、中国語の本を読みながら、まあ１ページ読むのに最初はね、５０回も引いちゃったけれども、１年もたったらだいたいねえ、４～５くらいで読めるようになりますからね。そういうまあ、とにかく自分で努力して、自分で読む力をつける以外に方法はないわけですから。自分で辞書を引き引き、引きながら、文法も同時に書いてあることがたくさんありますからね、それも読みながらしていくと、ほぼわかるようになるはずですから。最近は便利な医古文を読むための現代中国語の講座みたいなものがあるんですね。僕らがね７～８年前にね、週に１回ずつね、中国語を読む、中国の医学論文を読むためのね、中国語の勉強会を開くから来てくれって呼んだ方があって、で一年間来てくれて、大変勉強になったんです。その方が引き続きいろいろやってくれて、その方がいま現代医学論文を読ませる本を出して、講座も確かあるはずですね。ただまあ、基本的には何も知らなくても、辞書を引けばだいたい、だんだんわかってくるはずだということですね。そういう、それらが、医古文基礎学。日本で医古文基礎学ってないですけれども。そんな意味でもって、最初に備えるべき工具書ということね。

　そのほか、医古文基礎学の中にはですね、もちろん古代漢語についての文法、つまり語法ということなんですね、語法が書いてありますし、それから先程もちょっと出ましたけれども、古い時代にはですね、全くいま私たちが「えー、そんな」と思うようなですね、文字を通用させるっていうことがよくあるんですね。音通仮借というんですか、音が通じ合って、同じ音韻、音のどれに属するかとかですね、通用しあっちゃうんですね。それで簡単に違う文字、いままでの解釈とは全く違う意味になるんじゃないかと思う文字をもってきちゃう、ということがたくさんある。で、そういう意味ではですね、音韻学っていうのはとても重要なんですね。ところが音韻学っていうのは、これは中国で延々と引き続き発展しているっていう変な学問で、いま現在でも日々に発展している、そういう学問分野ですね。ですから、なるべくならば音韻の新たな発展の姿をですね、たえず中国系の書店に行って、新しい勉強材料を探してきて、同時的に勉強する。そういうようなことが、音韻の専門家になるには必要ですね。日々発展しているんですから。

　それから古代漢文を読むのに必要なものはたくさんあるんですけど、古い本を読むときに必ず必要な作業っていうのがあるんですね。それは、前にも言った校勘作業ですね。比較して勘案する。前にちょっと、『素問』という本は、どのような経緯で作られて、伝わって、いまあるのかっていうお話しをしました。唐代に王冰という人が大改訂した『素問』をもとに、さらに宋代の勅命による改訂を経て、その本が失くなっちゃいそうになって、また新たに版木を作って印刷、という系統の本が、実はいま有るってわけです。例えば『素問』の成立した時期を、前漢から後漢のころとしますと、二千年来ずーっと書き写され書き直され、という経緯を経ていまに至っている。そうすると、一番最初に書かれた原『素問』というのはですね、見ることができない以上、より正しい文字に訂正しながらですね、読んでいかなければならないという宿命を、中国の人たちはもっているんですね。最初は、竹簡や木簡にですね、手書きでもって写し写して、伝えられてきた本が基本になっている。宋代の中からやっと印刷術が発展して木の板にですね、文字を掘って大量に紙に印刷するという、そういう時代を経てからは、書き間違いの率がですね、比較的少なくなってきています。けれども、それでも木版を彫るときに、職人がですね、「こんな字はおもしろくないから、い

いから変えちまえ」とかね、そういうことをやっている可能性もあるでしょうし、まあいろいろある。そういう意味では、これにも比較しながら文字を訂正していくという作業が必要なわけです。そのためにいろんな方法があるんですけれども、本校・対校・他校・理校と、４つの方法が校勘の方法としてある。で、それはどのような資料をもとにして、どんなことを知ることなのかっていうことをですね、校勘学というんですね。そういうことも医古文基礎学の中では基礎的な知識としてもつようにして、もたせるようにしているんですね。

そういうようなことを経てですね、訓詁というようなことが、用語を正しく解釈しようというようなことが、できてくるんですね。そのうえに、書誌学というような古い学問がありますし、なかなか正しく本を読むというのが、中国の医学書については特に難しいわけですね。ですから、そういう基礎的な勉強の方法を身につける学問として、医古文基礎学というのがある。で、この医古文基礎学、日本ではまだいい翻訳書がないんですね。で、それは内経医学会の講師をする宮川浩也先生が、ここ何年かかけて医古文基礎の翻訳文を作ったんですけれども、「本を出せ」と言っても、「まあいまそんなことよりももっと大事なことがあるから、まあどうでもいいや」となかなか出してないんですけれども、勉強したい人があったら、彼に連絡をすれば、医古文基礎の勉強方法を多分伝えてくれるだろうと、こう思います。

そんなことでもって、とにかく古医経を読む力をいろんな方法を使って、それぞれご自分の力で身につけるということをやらない限り、いつでも人の話を聞いているという立場になっちゃう。自分で本を読むという力をぜひつけていただきたい、こう思います。

それから、原文を精読するというのは、何といっても基本ですね。『素問』の原文を１日に１字ぐらい、『漢和大辞典』などを使って調べる。調べてみますと、１字についての意味、時代によっても違うし、それから他との兼ね合いでもって違った読み方、違った意味あいをもってるということがたくさんありますので、そういうのは辞書をひいてですね、自分で考えて選んで、こういう解釈にした方が良かろうということをですね、やらないと自分の力にならないし、全体の水準を高めるという基幹を全うすることができない、こういうことになるわけですね。でもそういう、原文を精読する、一字一字精読するということでもって読む力をつけることが、それが同時に原文に慣れるということになりますので、それはできるだけテキストを読んで、すらすらと読んじゃうんじゃなくて、もう一回「あれは間違っているかも知れない。あいつ、あんないい加減なことを言いやがって」と言えるようにぜひなっていただきたい。

それで、１０００年近い、特に『素問』などですとね、中国系医学の基礎・基本文献として位置づけられている経典ですから、さすが中国、『素問』ひとつとってみても優れた解釈をした人がワンサカいるわけですね。ワンサカいるのを全部目を通すわけにいきませんので、比較的学者が評価してですね、この１３００～１４００年で『素問』についていい注釈をしたのが、これとこれとこれとこれ、というのがだいたいわかっているんですね。で、それらの注釈をしたのが自分でもう一度、どういう解釈・注釈をしているのかってことを、できるだけ自分で見るということをしてですね、それによってもともとの原文、経文とも言いますけれども、原文をですね、正しい字にですね、自分で見つけるということが必要かと思います。

注釈書には、どのようなものがあるのかを挙げてみます。『素問』には、優れた、いまでもそのまま通用できるというような注釈をしているのがいくつかある。一番目は『太素経』ですね。楊上善という人が、西暦６１８年頃、唐の高祖の頃に、『黄帝内経太素』に注をしたという。ここで、いわゆる『素問』と『霊枢』を類纂したことになってますですね。分類して編纂し直すという。これは多分、楊上善が類纂したのではないだろうと言われてますね。楊上善以前に類纂されていた『黄帝内経太素』に、楊上善が注釈を加えたものだろうというふうにだいたい考えられている。で、これからひとつひとつ皆さんと、ずっと『素問』を読んでいくんですけれども、その中で楊上善の注釈を非常にたくさん用いています。その楊上善の注釈というのがですね、どういう優れた注

釈かということもそれでわかっていく。
　それからもちろんいまの『素問』のテキストになっている、唐代に王冰という人が、楊上善の後に、つくった王冰次注本というものですね。その王冰の注釈というのもですね、『素問』注釈の基本姿勢を作っているということがありますし、重要な注釈ですね。ですから、王冰の注を参考にしながら解釈をする、ということがずっと絶えず行われてきている。
　その他にもですね、明代の呉崑という人が、これも変わった注釈をしている。それから『類経』に張介賓が加えた注。非常にすぐれたものがたくさんある。その他にですね、比較的使われるものとしては、『素問経注節解』の姚止庵、『釈義』の張琦などが中国のものでですね。
　日本のものでは、まず多紀元簡一家ですね。考証学、まあこれは中国で発達した新しい学問なんですけれども、それを医学に応用するという、そういう仕事をしてですね、多紀元簡の『素問識』『霊枢識』という注釈書ができあがります。これはいまでも非常に重要視しています。それからさらに、お父さんの元簡が見なかった新しい資料を利用した、息子の元堅の仕事。それは江戸時代の末期にですね、『太素経』というのが、仁和寺から発見されたんですね。仁和寺に世界でただ一部だけ残ってたのが発見されて、江戸時代末期では大事件だったわけですね。それまでは、『素問』『霊枢』の解釈をするのにどうしてもうまく解釈がつかなかった部分などがですね、仁和寺の『太素経』と比較してみると「何だ、こんな字だったのか」ということがたくさん出てきたんですね。大きな例として、『霊枢』の九鍼十二原というのは、『霊枢』を通じて最も重要な篇のひとつなんですが、それまで比較・校勘する材料がなかったわけですね。それが『太素経』によって校勘してみると、いままで解釈が全くうまくつかなかった部分が氷解しちゃうというくらいにいい。『素問』にも九鍼十二原に関わる篇はいくつもあります。それで『太素経』を参考にして新しく、親父の『素問識』を更に補って、解釈をするっていう作業をしたのが、元堅の『素問紹識』。これもいまでも高く評価されているんですね。これにつきましては、井上雅文先生が日本内経医学会、内経医学会の井上部会というのがありまして、そこで『素問紹識』の研究をこの数年ずっとやってきて、多分今年の末で３～４年かけてるのかな、『素問紹識』の抜本的研究という作業をすすめて、来年の経絡学会に、特別研究発表をやってくれるだろうと期待しているんです。そうすると『素問紹識』のいいテキストができる。いままでは日本では出版されたことがない。台湾でもって「皇漢医学叢書」というのが出て、それが日本に逆に入ってきてた。数年ほど前に、オリエント出版社で『素問紹識』をですね、ほかの本と一緒に、シリーズの中に入れて出して、『素問紹識』を具体的に研究材料に使うことができるようになってきたわけです。けれども、『素問紹識』もいろいろこう研究してみると、ずいぶんと抄本がありましてね、非常にいいテキストが発見されて、それを分析して、『素問紹識』の定本にするという方向で動いてきているわけです。
　これらは、なるべく手に入れてもっていてほしい。安い本があります。中国でもね、やっぱり日本の多紀一家の仕事を高く評価していまして、多紀元簡の『素問識』『霊枢識』と、多紀元堅の『素問紹識』と多紀元胤の『難経素紹』という多紀親子のすぐれた注釈書を１冊にまとめています。あれはまだ中国系の本屋さんで手に入ると思います。１５００円ぐらい。持ち歩いて見られるのでいい。ただし、これも簡体字。
　その他の江戸考証学派の著作もだんだん日の目をみるようになってきました。幕末に幕府直属の医学教育機関として、医学館というのがあって、それを主宰した多紀元簡たちのものなんですね。幕末の約１００年間、医学教育を担当していたんですね。いまで言えば国立東京大学医学部みたいな役割をしていたんです。毎回『素問』や『霊枢』の講義があって、それを半年か一年で終わらせる。非常に目の細かい、詰んだ教育をしていた。たくさんの講師も養成してたんですね。講師、つまりいまで言えば医学部の助教授、教授みたいな感じですけれども、養成している。で、そのメンバーが、多紀元簡は別格ですけどね、元堅とか渋江抽斎とか森立之とかいう江戸医学館での講師が、たえず集まっては議論してですね、集まっては、酒飲まないで議論してですね、議論した後に

多分酒飲んだんだろうと思いますけれども、そうやってですね、いい雰囲気を作って、お互いにですね、切磋琢磨してすぐれた研究がいくつも出てきてる。多紀元簡の代表的な本『素問識』は１８０８年ですし、『霊枢識』も１８０８年ってことになる。まあ出たとき多分一緒に出した。『難経』の解釈ではですね、いまだに最もすぐれている注釈本のひとつという『難経疏証』、これは元簡の長男の元胤、１８１９年。

そこで森立之、この人は、比較的おしまいの方ですね。多紀元簡・元胤たちがですね、ほぼ同時代ですけれども、お互いに研究を高めあって、非常にいい時期ですね。僕らもそんな感じのことを、最近しているんですね。原塾っていうの始めて、内経医学会に引き継いで、でお互いに切磋琢磨する、厳しい状況をこの７～８年やってきたんです。そうするとだいぶ共通して、問題がですね、転換の仕方がいくつもいくつもあって、１＋１が２じゃなくて、３とか４とかって、こうなってきますね。２×２とかって感じになってきますね。そんなふうに、幕末の江戸医学館の講師連中がですね、多分集まっては議論してですね、新しい勉強方法を「昨日これを身につけたから、今日こうだ」とやりあっている、そういう非常にいい時期に森立之もいたんだと思うんですね。そのほぼおしまいの頃に、『素問』について諸研究の成果を全部もらいながら、自分で独自に更に研究を加えてですね、まとめたのが『素問攷注』というのですね。

森立之ってのは、ほとんど最後まで生きているんですね。長生きしてるんですね。好きなことをやって生きたから、多分一番最後まで生きちゃったんでしょうけどね。医者のくせにね、芝居が好きでね、役者の真似して舞台に乗っちゃったりなんかして、で、破門になっちゃったりね。いろいろ好きなことやって、だから多分長生きした。まあ話を戻して、７８歳ですか、８０年近く生きている。で、『素問攷注』だけじゃなく、攷注シリーズ、『傷寒論』とかいろんな攷注全部、大変な仕事をやりきっちゃったんですね。膨大な、それぞれにすぐれた、非常にすぐれた自説を展開していますから。自分でこうだということをですね、案外古典に携わる人っていうのは言い切れないんですね。ですから、渋江抽斎の『霊枢講義』を読んでみますと、案外ね、「抽斎案ずるに」というのは少ないのね。この文は先輩のこの人がこう言ってるしね、歴代の注釈書はこんなこと言っている、で終わっちゃう部分も多いんですね。で、自分ではこれはこう思うっていうのが少ないんです。森立之は多いです。この人は本当に途中でもって、あいつらはみんなバカじゃないかってな言い方でもって、俺はこんなこといま気づいたぞって、そういう書き方をするところがありまして、非常に楽しい、おもしろい。で、同時代に山田業広って人が、多分、多分一番最後まで生きて、同時代の人たちの研究成果をまとめていました。

残念ながら日本では、その直後に明治維新というのがあってですね、政府が医学・医療を全面的に西洋医学の方に変えてしまってですね。それまで蓄えてきた東洋医学的な日本の医療・医学の内容を全く評価しないという時代に入っちゃったんです。ですから、彼らがあんな地道な仕事をやっていながら、全部波の中に呑み込まれちゃってる。１００年間日本人は目にしなかったんです、ばかなことに。ほとんど、ほぼ１００年後ですね、こんなすぐれた『素問』の研究者がいて研究書があった、と見出されたのは。もちろん、その時代ですから、印刷出版されるはずがなくてですね、手書きの原稿ですね。手書きで、自分で書いた資料が見つかった。それを最初に（古典研の）井上先生たちが見つけてきた。国会図書館には、古い時代の貴重な資料があるけれど、そのまんまコピーなんか出させてくれないんですね。「これ、どうしてもコピーがほしい」って言うと、「じゃあまあ、君たちの費用でもってマイクロを撮りなさい」。マイクロ写真を撮る費用をたくさん払って、まずマイクロを作る。そのマイクロからコピーを作る。最初に欲しいと言ったやつは、全部負担しなくちゃいけない。嫌なら、撮っちゃダメ。で、そういうようなことを彼らはやっていたわけで、本当に驚いたようなことがあって、それをオリエント出版で本で出してくれるようになった。そういういい時代になった。そんなことがですね、多分相乗効果を生んで、いま、日本での古典研究が新しい動きを動き出し始めているんだろうと、こう思うんですね。

その他にも、『素問』の、その当時の注釈としては、喜多村直寛の『黄帝内経素問講義』というのが出ています。喜多村直寛の注釈というのは、僕らはほとんど見ていなかったんですけど、中国ではわりと知っていまして、７～８年前にまだこれが出る前ですね、北京中医学院の王洪図さんという方にお会いしたときに、「日本では幕末の頃にすぐれた本がありますね。例えば喜多村直寛さんとか」と言われて、「あ、そうでしたね」とか言っておきました。やっぱり向こうの先生はよく目を配っている。

その他に『素問』の注釈書としてはですね、『素問研』、時代はよくわからない、非常にすぐれた本です。『素問識』の前に書かれた本で、『素問識』を多紀元簡が書くときに非常に重要な参考資料にした。盗作、その頃盗作という意識はなかったんですけれども、元簡は『素問研』からだいぶ盗作してるってなことを言われているくらいにすぐれた本。そのようなものをいま目にすることができます。

それから、その次に最近の昭和の参考書。全部は挙げられないんで、この中でどうしてもこれはというのは、やっぱりまず最初に我が恩師の丸山昌朗さんがあちこちにお書きになった論文。これは私がまとめたんですけれども、創元社から出した『鍼灸医学古典の研究』。これは現代日本、古典医学の源流というんですかね、そういう流れを作った重要な諸論文が入ってます。それから、丸山先生の弟子であり、私の友人でもある、もう１５年ほど前に亡くなった藤木俊郎さんの『素問医学の世界』、『鍼灸医学源流考』。亡くなってから藤木さんの弟子の人がまとめた。これも非常にすぐれた程度の高い、香りの高い理論がたくさん入ってます。『素問』の成立、『霊枢』の成立、『素問』の各篇の成立といったことを考える上で非常に重要な示唆をしています。これらはぜひお読みになってみないと、どんな方法でいま古典の研究がすすんでいいのかというのがわからない。

あと現代のっていうのは、池田政一さんの「素問ハンドブック」、小曽戸さんのお父さんのもの、柴崎保三さんのものがありますけれども、いずれも幕末の「攷注」とか直寛とかと比べると歯ごたえがないという感じがしています。

『霊枢』については、この講義は『霊枢』じゃないのであまりたくさん挙げませんけれど、『霊枢』の現代注釈書としては郭靄春さんの『黄帝内経霊枢校注語釈』。これは『素問』と並んで優れている。それから、オリエント出版で幕末の優れた注釈書として、渋江抽斎の『霊枢講義』とか。これは『霊枢』を勉強するときに、やっぱりなくてはならない資料書だろうと思います。渋江全善抽斎が、幕末の医学館において３回講義をやったときのテキストなんですね。自分用の講義テキストで、たーくさんの、欄の上にも下にも真ん中にも書き込みがたくさんあって、どの書き込みがどの文に対する書き込みなのかわからないような箇所があるんですね。それをちょっと後輩だった山田業広という人が全部整理し直した。ヒマだったんでしょうかね、当時。よっぽどヒマで、あの頃はやることないのか、ないわけないんですけれども、まあヒマがあって、渋江抽斎の『霊枢講義』を全部整理し直して、きれいな文字でもって、きれいにその注釈を本文の中に送り込んだんですね。これはだから、抽斎の自筆本と業広の整理本を両方持っていると、非常に具合良い。

日本でですね、こういうような本を復刻して出そうと思うと……。中国だったらおそらく初版２万部とか出せるでしょうけどね。全国に４０くらい中医学院があって、毎年３万人とか３万人以上ですね、はらはら鍼灸医師ができた、中医師ができたなんていうね。そういう人はみんな医古文基礎をもちろん研究の主要な対象に入れている。例えば、日本のすぐれたいろんなものが最近紹介されてますけれども、森立之の『素問攷注』を仮に出すとして、初版２万部とか３万部とか出せるような。日本ではとんでもない、そんなことやったら普通の会社みんなつぶれちゃいますから。初版５００とかね、初版１０００とかしかいう単位でしか出せませんから。そうすると、だから高くなるんですね。どうしても高いと買わない、読まない。

中国で最近出ているものも、いくつかは参考にされるといいと思います。まず銭超塵の『内経語言研究』、今年の春ぐらいに出た本です。これは非常にすぐれていると思います。最近の新しい音

韻学を、本当にほうぼうに使いながら、「えっ、いままでこんな解釈できなかったのに、えっ」と思うようなたくさんのヒントをもらった。とにかく重要な資料の中に千々の指摘をもらっている。それから注釈書としましては、中国系の中では、郭靄春さんの『黄帝内経素問校注語釈』というのが一番簡潔でいいです。郭さん、何回か会いましたけれども、矍鑠とした老人で、非常にすぐれた学者ですけど、自説を非常に曲げないというか、とても頑固な方ですけれども、そういうところがなかなか、ちょこちょこと出ていて、にやりと笑うような。それから中国で一番読まれている『素問』の注釈・解釈書というのは、『素問訳釈』という、南京中医学院。これは多分解放直後、１９５２～３年か４年ぐらいに第一版が出て以来、ずーっと読まれている。おそらく２０～３０万部出てるんじゃないですかね。そのくらい『素問』の勉強をするときに読まれている本です。日本で５～６年くらい前に翻訳して出すと、東洋学術出版社の山本さんが言って、それに若干僕が関与して、それがまあいまだに出ないんですが。ほとんど準備は終わっていて、多分近々日本の翻訳本が出るという。まあそれも彼に悪いですけれども、買おうと思えば原書が安く買えるはずだし、買って読んでみると、随所にやっぱり不満が残っている本です。それから一連の、その他のですね、『素問今釈』とか『素問注釈匯粋』とかって本がありますけれども、余裕があれば持ってみた方がいい。どれがいいかは……。

　えー、これくらいで、また気がつきましたら講義の中で、いろいろなことが多分出るでしょう。

　一応『素問』『霊枢』をどのようにみるのかっていうようなことについては終わりにして、いま目にできる『素問』のですね、もとを作った王冰っていう人はどんな問題意識をもって、『素問』を次注したのかということを知るために、王冰が書いたといわれる序文、王冰ではないのかもわかりませんけれども、王冰の次注本に王冰が自分で序文を書いた、一応そのように思ってですね、読んで行きましょう。それがまた『素問』の全体像というお話しになると思います。

　王冰という人が次注をしたときに、あの、重要な問題があったわけです。それで王冰の序文をよく読むと、王冰がどのようなことをしたのか、それ以降の『素問』がその影響をどんなふうに受けているのか、ていう基本的なことがわかります。それはね、やはり知っておかないと、『素問』を読む上でもって困るんですね。

啓玄子王冰撰〔新校正云按唐人物志冰仕唐爲太僕令年八十餘以壽終〕

〔解説〕

　啓玄子王冰といっていますね。これは道教の士、道士なんですね、王冰っていう人は。道教では何々子、玄っていうのは特に好みますね。だからこれは王冰、自分は道士である、ということで、名前の上にわざわざくっつけたと思っていいでしょうね。

　序文の原文を見てみると、大きい文字は経文と呼んでいます。一行に一字ずつ書いてある。または本文ともいいますね。それから一つの行に二行に細かい文字が入ってますね。細字双行注と呼んでいます。【編者注：これは顧従徳本の影印について言ってます。このテキストでは細字双行注を示す必要が有るときには、〔　〕の中に入れます。】例えば、啓玄子王冰撰の下に二行に分かれて、「新校正に云う、唐の人物志を按ずるに、冰は唐に仕えて太僕令と為り、年八十余、寿を以て終わる。」この二行は新校正をした、さっき言いましたね、新校正という作業をやった宋代の林億たちが、その新校正の中でこういっているんです。要するに林億たちの注釈ですね。王冰を調べますとこうなんですよ、と。唐代の人物について書いた唐の『人物志』という本があってですね、それによれば冰、王冰は唐朝に仕えて、太僕令となって仕事をやっていた。としは八十余歳でもって

亡くなった、と。語の注釈っていうのはそういうのも含めて、下に書いてあるわけです。
　で、そういうまあ経歴を持った、やっぱり大学者ですね。臨床も非常に厳しい臨床を、たぶんやっていたんじゃないか。以下『素問』を読んでいきますと、王冰の注釈っていうのはたくさん出てきますけれど、それを読むと、非常に優れた臨床家でもあったと思います。ただ少し悪評される部分はあるのですね。

夫釋縛脱艱全眞導氣拯黎元於仁壽濟羸劣以獲安者非三聖道則不能致之矣孔安國序尚書曰伏羲神農黄帝之書謂之三墳言大道也班固漢書藝文志曰黄帝内經十八卷素問即其經之九卷也兼靈樞九卷迺其數焉

〔和訓〕
　夫れ縛を釈き、艱を脱し、真を全くし、気を導き、黎元を仁寿に拯い、羸劣を済いて以て安きを獲る者は、三聖の道に非ざれば則ち之を致すこと能わず。孔安国、尚書に序して曰く、「伏羲、神農、黄帝の書は之を三墳と謂う。言は大道なり」と。班固が漢書の藝文志に曰く、「黄帝内経十八巻、素問は則ち其の経の九巻なり、霊枢九巻を兼ねて、迺ち其の数なり」と。

雖復年移代革而授學猶存懼非其人而時有所隱故第七一卷師氏藏之今之奉行惟八卷爾然而其文簡其意博其理奥其趣深天地之象分陰陽之候列變化之由表死生之兆彰不謀而遐邇自同勿約而幽明斯契稽其言有徵驗之事不忒誠可謂至道之宗奉生之始矣

〔和訓〕
　復た年移り、代革ると雖も、而も授学は猶存す。其の人に非ざるを懼れて而して時に隠す所あり。故に第七の一巻は師氏が之を蔵し、いまの奉行するは、惟八巻のみ。然り而して、其の文は簡に、其の意は博く、其の理は奥に、其の趣は深し。天地の象は分れ、陰陽の候は列し、変化の由は表われ、死生の兆は彰らかなり、謀らずして遐邇（かに）は自ら同じく、約することなくして幽明は斯く契る。其の言を稽えるに徴しあり。之を事に験すに忒（たが）わず、誠に至道の宗、生を奉ずるの始と謂うべきなり。

假若天機迅發妙識玄通藏謀雖屬乎生知標格亦資於詁訓未甞有行不由逕出不由戸者也然刻意研精探微索隱或識契眞要則目牛無全故動則有成猶鬼神幽賛而命世奇傑時時間出焉則周有秦

公漢有淳于公魏有張公華公皆得斯妙道者也咸日新其用大濟蒸人華葉遞榮聲實相副蓋敎之著矣亦天之假也

〔和訓〕
　仮（たと）えば天機迅発にして、妙識玄通するが若し。蔵謀は生知に属すると雖も、標格は亦詁訓に資する。未だ嘗て行くに逕に由らず、出るに戸に由らざる者あらざるなり。然り、意を刻し、精を研ぎ、微を探り、隠れたるを索め、或は真要を識契するときは、則ち牛を目して全きなし。故に動ずれば則ち成ることあり。猶、鬼神の幽かに賛し、而して命世奇傑の時々に間して出るがごとし。則ち周に秦公有り、漢に淳于公有り、魏に張公華公有り、皆、斯の妙道を得たる者なり。咸（みな）、日に其の用を新たにし、大いに蒸人を済う。華葉は遞（たが）いに栄え、声実相い副う。蓋し、教えの著しきなり。亦天の假なり。
〔解説〕
　「天機」、天賦の資質ですね。『荘子』に「其嗜深者、其天機浅」、生まれながらにして備わっている品格・資質というかですね、そういうものが欲の深いやつにはないんだ、少ないんだ、当たり前だ、そう言われちゃうのね。天賦の資質が早々（早速？）に、発生するというようなことですね。「妙識」、非常に絶えざる知識がですね、「玄」、玄てのは黒い、奥深いというね、これに目へんをつければ「眩」、目が真っ暗になる、暗いとかですね。「玄」、奥深いところに通じているようなものである。「蔵」はまあ完全に備わっているという意味ですね。「蔵謀」、備わった認識能力ですね。そういうものは「生知」、生まれながらの知恵、本能にほぼ属しているけれども。そうは言っても「標格」というね、すぐれて高い品格、学識ね、学問を積み重ねてですね、高い水準にいけば、そのことはまた「詁訓」、古い文章の字句を正しく解釈することに助けになるんだ、と。本来は生まれながらの資質に関係するんだろうけれども、例えば生まれながらに、大した、僕みたいにですね、資質がなくても、一生懸命やりゃあ何とかなる部分も多少ありますよという、まあそういうことを聞いて、安心しているわけです。「標格は亦詁訓に資する」。「未だ嘗て行くに逕に由らず、出るに戸に由らざる者あらざるなり」。これは『論語』の中にこれとまあ同じような言い方があるんですね。「行くに徑に由らず。」「徑」っていうのは『論語』のここでは、小径ないし近道。こちゃこちゃした近道を辿って行くなよ、どうせ行くなら広々とした大道をね、たとえ遠く時間はかかっても構わんからしっかりと歩いて行けよ。そういうことを言ってます。王冰序のこの「未だ嘗て行くに逕に由らず」は、これは小径とか近道じゃなくて、道ですね。道なしにどっかに行くことはできない、ということですね。まあ、道がないところなんて行かれたことないでしょうけれども、大変ですね。どっかに行くにはちゃんとした道路を通っていった方がよろしいだろうと。それから、ここから門を出てですね、表に出るのにですね、玄関を通んないで窓から出るわけにはいかないわけですね。窓から出る場合もあるでしょうけれども。出入りするときは必ず戸口を経るであろう。つまりそういうようなことがですね、古い医学書を読むときに最も重要なことである、ですね。で、そこで王冰もですね、「意を刻し、精を研ぎ、微を探り、隠れたるを索め」っていう作業をしてきたんですね。自分の気持ちを絶えず刻み込みようにですね、研究をしてですね、それから細かいところのわからない問題はですね、よく資料を集めて、あるいは辞書をひいて調べ調べたりですね、で隠れた意味をですね、正しく表にあらわす。そういう努力をする。あるいはですね、「真要を識契する」、本当のことをですね、識別をすることができればですね、もう「牛を目して全きなし」。これはよく使われる典故ですけれども、牛の品定めをするということで

すね。『荘子』の養生主というところに出てくる。熟練の域に達して、だから変化が起きて陰陽が変動してですね、それであるときに、それまでうまくいかなかったことがふっと達成されることもある。で、それらを見てみると、医学の長い歴史を見てみると、鬼神が密かに助力をしているようにも思える、と。鬼神、まあ人間の感知できないようなところにですね、世界を地球を動かしているというような、そういうものがあるんでしょうかね。そういう鬼神といわれるようなですね、不可知の部分でですね、密やかに、医学をより進歩させようということをですね、助力しているものがあるんじゃないかと思うほどである、ですね。「命世奇傑」がときどき出る。「命世」、命の世って書いてあるんですけれども、これは名声を得るのメイセイと同じですね。非常に名前を知られたすぐれた「奇傑」傑人がですね、ときどき出てくる。で、どんな人がいままで出てきたか挙げればですね、こういう人がいる。周の時代には秦公、秦越人扁鵲といわれる、倉公列伝に列せられている名医、それを秦公とまあ一応言っているんだろうと思うんですね。これはだいたい周代ですけれども、周の、もう春秋から戦国期にかけてですね、マイナス４００～５００年くらいに活躍しただろうと、こう例えば『史記』で言われているんですね。実際には実在しなかったんだろうと思うんですね。ただまあ、ずーっと秦越人扁鵲というふうに、『難経』が『隋書経籍志』に載せられた頃から言われているんですね。だから王冰もその説をとっている。周代には秦越人扁鵲というすぐれた偉人がいたし、漢代になると、前漢ですね、前漢には淳于公、これは倉公淳于意、倉庫番だったんですね。倉庫番でいたけれども、なかなかその、親切なことをやってるわけですね。公乗陽慶という名医から教えを受けちゃったんですね。それですぐれた医者、名医になっちゃったという、淳于公という人がいた。それから三国志の魏の時代になると、張公とか華公という人がいる。張公というのはですね、張機と言われているんですね。張仲景、『傷寒論』を著した人ですね。張機という人がいたし、それからもうひとり、華陀という人ですね。麻沸散、麻酔薬を作って飲まして、それで無痛の手術をしちゃったという、世界で最初の麻酔に成功した名医ですね。華陀、後漢書に列伝が載ってますね。そういう人がいたと。みんなそれぞれですね、日々医学・医療のですね、新しい開発をしてですね、それで病人・庶民たちを救ってきている。で、「華葉」、花や葉はですね、お互いにそれぞれ助け合い、影響しあってですね、大きな医学・医療を栄えさせてきている。それはきっとですね、最初の教えが非常に優れていたからである。あるいはそのことを、それは最初の教えというのはですね、天の仮の姿なのかもしれない。こういって『素問』を賞揚している。

冰弱齢慕道夙好養生幸遇真經式爲龜鏡而世本紕繆篇目重疊前後不倫文義懸隔施行不易披會亦難歳月既淹襲以成弊或一篇重出而別立二名或兩論併呑而都爲一目或問荅未已別樹篇題或脱簡不書而云世闕重合經而冠鍼服併方冝而爲欵篇隔虚實而爲逆從合經絡而爲論要節皮部爲經絡退至教以先鍼諸如此流不可勝數且將升岱嶽非逕奚爲欲詣扶桑無舟莫適乃精勤博訪而并有其人歴十二年方臻理要詢謀得失深遂夙心時於先生郭子齋堂受得先師張公秘本文字昭晰義理環周一以参詳群疑冰釋恐散於末學絶彼師資因而撰註用傳不朽兼舊藏之卷合八十一篇二十

四卷勒成一部冀乎究尾明首尋註會經開發童蒙宣揚至理而已

〔和訓〕
　冰は弱齢より道を慕い、夙に養生を好む。幸いに真経に遇い、式（も）って亀鏡と爲す。而るに世本は紕繆し、篇目は重畳す。前後は倫せず、文義は懸隔す。施行は易からず、披会も亦難し。歳月は既に淹い、襲うて以て弊を成す。或は一篇の重ねて出でて、別に二名を立つ。或は両論併呑して、都めて一目と為す。或は問答未だ已わらざるに、別に篇題を樹て、或は脱簡を書かずして、世、闕たりと言う。合経を重ねて鍼服を冠す。方宜を併せて玆篇と為し、虚実を隔てて逆従と為す。経絡を合して論要と為し、皮部を節して経絡と為す。至教を退けて以て鍼を先にす。諸の此の如き流れは勝げて数うべからず。且つ、将に岱嶽に升らんとするに、逕に非ざれば奚（いずこ）より為す。扶桑に詣でんと欲すれば、舟なくして適くことなし。乃ち精しく勤め、博く訪ねて、而も并びに其の人有り。十二年を歴して、方に理要に臻る。詢いて得失を謀るに、深く夙心に逐う。時に先生、郭子の斎堂に於いて先師張公の秘本を受得す。文字は昭晰にして義理は環周す。一たび以て参詳すれば、群疑は氷釈す。末学に散じ、彼の師資を絶やさんことを恐れる。因って撰註して、用いて不朽に伝う。旧蔵の巻を兼ねて、合して八十一篇、二十四巻、勒して一部と成す。冀くば、尾を究め、首を明らかにし、註を尋ね経を会し、童蒙を開発し、至理を宣揚して已まん。
〔解説〕
　「冰は弱齢より道を慕い」以下に、王冰が見ていた全元起本ですかね、そういう『素問』がどんなにいい加減であるか、それを私はどんなふうに苦労して、どう変えてしまったか、とういうことが書いてある。「式」は、以と同じ。「式（も）って亀鏡と爲す」ですね。それから、「時に先生、郭子の斎堂に於いて先師張公の秘本を受得す。文字は昭晰にして義理は環周す。」これはねぇ、何を言っているのかというと、『素問』の、あらためてこの目次、目録を見てください。第１巻から第２４巻まで。それぞれの巻に３～４篇ずつ入っていますね。多いのは６篇入っていますけど。その目録の第１９巻、第２０巻、第２１巻、第２２巻、この４巻はですね、運気七篇って呼んでるんですね。この部分が、いまの序文でもって読んだ、張公という師匠の隠していた本で、これがいままでなかったから、『素問』九巻といっていながらね、実は八巻しかなかったんだ、と。それが『素問』の第七巻であると言うのね。ところがこの運気七篇ってのはね、古来『素問』を注釈したり講義したりする人が共通して、もともとの『素問』にはなかったと言う。これはこのときに王冰が、実はこんな秘本があったんで、入れておきましたよって言って、入れた本っていうことになっているんですね。で、この運気七篇ていうのは、『素問』の講義ではやらないことになっているんです。時代も違うし思想も違うし、内容がまぁ非常に似通ったところがたくさんあるし、『素問』のその前のいろんなものをですね、非常に巧みに解釈しているところはあるんですけれども、もともとは『素問』とは異質のものであるから、これは講義しないっていうことになっています。もしやれば別に運気論と呼んでやる、と。それからもう一つですね、いまの目録を開けてみてですね、第２１巻の刺法論七十二、本病論七十三の２篇は、その下に亡と書いてありますね。なくなっちゃってるんです。これもないわけです。『素問』合計８１篇中、９篇は、講義をしないことになっています。したがって『素問』７２篇をこれから講義する、ということになります。
　以下のところはですね、『素問』次注の王冰の重要な目的意識、ないし作業計画ですね。で、途中に合経とか鍼服とか方宜とか玆篇とか虚実とか書いてありますね。それはみんなその頃に王冰が見ていた『素問』からもってきた、『素問』の篇題名ですね。それをどうにしたのかっていうのが、経緯が明らかになっている。そこだけは少しよく覚えていた方がいい。「冰」、王冰、私は、「弱齢より道を慕い」、まあ王冰ってのは前にも言いましたように、道士、道教の士ですね。宋代・唐代に非常に、仏教とならんで一世を風靡した宗教ですね。中国の古い宗教、道教の士ですか

ら、「道を慕い」っていうのは多分そのことも含めてですね、いま言うような道だけではなくて、道教を非常に重んじていたというね。「弱齢より」、若い頃から。「弱」っていうのはね、上古天真論の中にも「黄帝弱にして能く言い」っていうのがあって、その弱は、齢７０日ですが、この「弱齢」というのはね、『礼記』っていう本の曲礼の中にですね、「二十歳を弱という」と書いてあるんですね。ここでは道を慕うっていうのはね、生後７０日で道を慕うっていうのはちょっと変ですからね、これは２０歳ってなわけですけど、２０歳の頃からですね、道を慕うということをね、好んで行い、「夙に養生を好む」、まあ養生（ようせい）学ですね。

だいたい中国の基本は、病気になってからやったんじゃ遅いんですね。病気になる前に病気にならないようにするっていうのはもう一番すぐれた医者のやることだという伝統がありますから、「養生（ようせい）」、病気をしない養生（ようせい）法というのは、これをまあ非常に重視しているんですね。そういうことが非常に若い頃から好きだと。「幸いに真経に遇い」、本当の本に遇っちゃったわけです。これはちょっと、そのあとのことの伏線にしてるわけですね。本当の本に遇っちゃった。『素問』というのは本当の本なんですけどね、その時見ていた『素問』はどうも間違って伝わってる可能性があって、欠けているという意識があるんですね。で、真経に遇ってですね、それを鏡とすることができた。ところが「而るに」、でも、世の中にずっと通用している、伝わっている本はですね、紕繆している、間違っている。篇目は重なっちゃっていることがあるし、前と後が倫していない。「倫」、ともがら、類、同類ですね。同じ様な類が……、類の関係になっていない。「前後は倫せず」、前と後がですね、全然、ちぐはぐになっちゃってるんですね。「文義は懸隔す」、文の意味、文字の意味がですね、はるかに隔たってしまっている。で、そのために「施行する」、実際に医学として応用・実行しようと思うのはとても難しい、と。意味がわかんないのがいっぱいあるわけですね。それから「披会」もまたむずかしい。「披」は、披露宴の披、「ひらく」ですね。本を開いて会得する、理解する。実際に行うのは難しいし、本を開いて読んでもですね、意味がよくわからない。ところがですね、「歳月は既に淹い」、もうすでにその『素問』という本ができあがっちゃってから、ずいぶん長い年月がたっちゃってる。そのためにですね、弊害がたくさん生じている。「襲うて以て弊を成す」、弊害がたくさん生じちゃっている。どういう弊害かといえばですね、以下に述べるようないくつもの特徴があるんですね。あるいは一篇が、同じ篇が重なって出て、別に名前だけ違う２篇になっちゃってる。あるいは「両論併呑して、都めて一目と爲す」、２つの違う篇なのに一緒にしちゃってですね、ひとつの篇になっちゃってるものもある。あるいは「或は問答未だ已わらざるに」、黄帝と岐伯の問答がですね、終わっていないのに、別に篇題、別の題目になっちゃっている。あるいは「脱簡」、前にお話したように、宋代までの本というのは、ほとんどみんな木簡や竹簡にですね、文字を一行をずっと二十何字書いてですね、それをひもでもって全部こう、順番よくですね、くくっていってまとめて一巻にするわけですけれども、それが糸やひもが切れちゃえばですね、バラバラになっちゃう。その中の１本が抜けちゃうってのが脱簡ですね。２～３本が違った組み方になっちゃう、錯簡ですね。そんなような脱簡があってですね、それで中身がわかんなくてずっとここの部分は欠文である、欠けちゃったんだというふうにいってた。

それをもうちょっと具体的に言うとっていうのが以下にかかってくるんですね。「合経を重ねて鍼服を冠す」。「鍼服を冠す」っていうのはですね、これは「合経」というのは多分、顧観光という人が「素問校勘記」って中でもって、いまの『素問』では経合っていっているのはもともとは合経であったのかと、とか言うようなことですね。それは『素問』のですね、離合真邪論の篇題の下にそういうふうに書いてある。「新校正に言う、案ずるに全元起本は第一巻にあり、名づけて経合、第二巻に重出して名づけて真邪論」と書いてありますね。要するに、新校正が見た全元起本では、この「離合真邪論」という篇は第一巻にあって、「経合」という名前がついている、冠している。経合篇ですね。で、同じ内容が全元起本第二巻に重ねて真邪論という名前でもって出ています

よっていうね。そのことをここで言っているんですね。さらにはいまの、顧観光さんの文章を読んでみますと、「新校正に言う、全元起本第一巻本書に鍼服篇なく、ただ八正神明論の首に用鍼之服という句あり。全本の第二巻に在り、けだし真邪論の前に在り、而して真邪論は則ち経合篇の重出なり、故にこのようにいう。」王冰の序文ではですね、「合経を重ねて鍼服を冠す」というふうになっていますね。「合経」、いわゆる経合という篇は、離合真邪論がもともと全元起本ではそういう名前だったんだけれども、ここで王冰が「鍼服を冠す」って言っている「鍼服」というの篇名はないですね。これは、いまの『素問』の離合真邪論の前に、八正神明論というのが有りますね。その冒頭の文、「黄帝問いて曰く、用鍼の服、必ず法則有り」、この「用鍼の服」の鍼と服をとって「鍼服」。多分これだっただろうということですね。で、これはですね、全元起本では第二巻にあって、全元起本の「真邪論」の前にあったということになってるんですね。だから、「鍼服を冠す」、「真邪論」の前に「鍼服」という名前の篇の名前がついていた、そういうふうに王冰が見ていたんですね。次の「方宜を併せて欬篇と爲し」っていうのは、森立之が異法方宜論と欬論との問題なんだというんですね。「異法方宜論を案ずるに、古くは欬論の末に併合されるか」ですね。王冰が見ていた本ではですね、『素問』に「欬論」という篇がありますね、それの最後のところにくっつけてあったんじゃないかと思うんですね。だから「方宜を併せて欬篇と爲し」と、王冰が指摘したわけですね。で、異法方宜論の内容と欬論の内容と全く違うんですね。これはもう明らかに王冰が言うように、分離独立させなきゃダメだという篇ですね。欬論というのは、欬、咳ですね、咳の基本的な問題を論じている。分類と治療法を論じている。異法方宜ってのは全く違って、中国尾大陸全土をですね、４つの方向・５つの方向に五行的に分類して、その特徴を述べてるんですね。どの地域はどういう気候条件があって、どんな物産が多いからどんな病気になりがちで、そうなるとどんな治療法がそこで発展したかってなことを書いてある。全く違う内容なんで、これはもう明らかに分離しなきゃダメだっていうことを指摘しているんですね。

「虚実を隔てて逆従と為す」っていうのは、劉衡如が言うに「四時逆従論は新校正は案ずるに厥陰の有余から筋急の目痛に至る全元起本の第六巻に在り」。具体的にその篇に入ったときにまた改めて指摘しますけれども、四時逆従論という篇の中ではですね、全元起本ではですね、それぞれ編纂されている巻が違うという指摘があるんですね。全元起本の中の「厥陰有余にして筋急目痛に至る」という部分、これは全元起本では第六巻にあったし、「春気経脈に在る」から篇末に至る、一番最後までの部分は、全元起本では第一巻にあったんだと、こう指摘してるんですね。

それから、「三陰三陽有余は実と為し、不足は虚と為す」。王冰は、全元起本に虚実はないと言っているけれども、第六巻にあるんだというんですね。こういうふうな問題があって、虚実と逆従という篇がですね、これがわかれわかれになっているのはおかしいという指摘ですね。その次の「経絡を合して論要となし」、この経絡というのはですね、経終に作るべしと指摘されている。経終というのは、『素問』の第４巻に診要経終論というのがありますね。で、伊沢柏軒という人、これは幕末の考証学者、１８０２～６３年。その伊沢柏軒さんが云うのにですね、「絡はおそらく終の誤りたらん。けだし玉版論要と診要経終であろう。ふるく合併して一篇となしたるなり」。『素問攷注』に書き込んである。それから劉衡如も、「絡はまさに終に作るべし。論はまさに診に作るべし。形近くして誤る。」絡と終、論と診は字の形が似ているので間違って書かれていたんだろう、ですね。だから「玉版論要」というのは、「玉版診要」ですね。玉版論要篇末には「論の要畢わんず」とあるけれど、『太素』巻１５の「色脈診」には、「診要畢わんず」と書いてある。これと連なる次の篇、診要経終論の篇首は「黄帝問うて曰く、診要は如何。」だから、これに基づけば、証明できる。「玉版論要篇は玉版診要篇の誤りとなす。而して経終をおかして論要となすの一語は注釈を煩わさずして、自ずから明らかなり」と。自ずと明らかですかね。難しいね。いま、王冰は玉版論要篇第１５と診要経終論第１６というふうにわけてありますけれども、これが王冰の見ていた本ではですね、一緒になっていたというんですね。

その次、「皮部を節して経絡と爲す。」経絡論というのはですね、新校正ではですね、「案ずるに全元起本は皮部論の末にあり」、経絡論というのは皮部論と一緒になっていたわけですね。で、それを「王氏分かつ」、王冰はここで分割したのである、というのね。王冰本第１５巻に、「皮部論」第５６と「経絡論」第５７というのがありますね。それは、王冰が分けたという意味ですね。その次、「至教を退けて以て鍼を先にす。」これはですね、著至教論第７５というのがありますね、このことを言っているんですね。それからその次は、このようにして一篇が重出したり、二篇がひとつにまとまっていたり、分けるべきものがですね、関係ない篇のおしまいにくっついていたり、いろんな間違いもたくさんある。あげれば数え切れないぐらいある、というんですね。だけれども、まさに「岱嶽」、今で言うところの泰山ですね。封禅の儀式を行う泰山。泰山に登ろうとするときは、道をとらなければどうやって登ることができようか、と。扶桑に参詣しようとしたければ、扶桑っていうのはね、中国の伝説では、東海の中に、東の海の中に、大きな神木があるんですね。そこへ詣でるのに船がなかったらどうして渡れましょう、と。

そこで、「精しく勤め」、間違いを全部正しておかなければ読むことができないよ、ということを言っているわけですね。詳しく調べあげて、「博く訪ねて」、それで「并びに其の人あり」、同学の志がいてですね、一緒にやってくれる人がいたので１２年間かけてですね、「方に理要に臻る」。まあ、芯、要点に達することができたということですね。で、改めていままでの『素問』と、自分の編纂し直した『素問』を比べてみると、得失を謀ってみると、「深く夙心に遂」ったいいものができた、ですね。で、時に先生、郭子の斉堂において「先師張公」、張文仲をさすという説もあります。張文仲ってのは唐代の武則天、則天武后ですね、則天武后の時代の御医、侍医なんですね。『随身備急方』という本を編纂しているとされている。そういう張公がずっと隠し持っていた本を伝授された。で、それは何かっていうと、ここではですね、『素問』というのはもともとは９巻あったのに、隋以降なくなっちゃって８巻しかないんですね。どこが抜けているかというと第７巻が欠本になっていたんですね。先師張公が秘匿していた本が、その欠本である、ということを王冰が言っている。ここにはそういうふうに書いてあるんです。それでその本を読んでみると、文字が非常にはっきりしておるというんですね。「義理」、意味ですね、意味や理屈は通っている。全部、首尾一貫している。で、ひとたびこの第７巻を参照してですね、『素問』全体の疑問点を見直してみると、「群疑」、たくさんあった疑いが全部、氷が解けるように解けてしまった。それくらい大事な優れた本であると、宣伝してるんですね。で、この『素問』という本がですね、「末学」、枝葉末節の学問とよばれている、末学の中に大事な『素問』が埋もれてしまって本筋を見失うようなことになると困るからですね、そのようなことによって「師資」、大事なね、先輩から受け継いできた大事なものが、絶えてしまうことがこわい、と。そこでこの第７巻、先師張公が秘本としていた第７巻も含めてですね、、「撰註して、用いて不朽に伝える」、『素問』を改めて編集し直してですね、注釈を加えて、今後ずっと『素問』がですね、「不朽」、腐らないように朽ちないように生かして伝えていきたい。そこで、「旧蔵の巻」、つまり第７巻を含めて、合計８１篇２４巻にしてですね、「勒して一部と成す」。「勒」ってのは、掘り刻むっていうんですね。だから木の板、木版にですね、文字を刻んで、それでひとつの本にした。「冀わくば、尾を究め、首を明らかにし」、首尾を明確にしてですね、何があらわれ何がないのかはっきりさせる。それから「註を尋ね経を会し」、諸注を、いろんな注釈をですね、たずね、探求してですね、それで経文をうまく適合させる、と。「童蒙」、初学者の智恵を開いてですね、「至理」、非常にすぐれた理論・技術ですね、それを宣揚するということをした。

と、まあ言い切れるくらいは努力をしました、といったんですけれども、確かに優れたところがたくさんあります。王冰によってですね、篇次の間違いが、解かれたりすることがたくさんあるわけです。注釈もすぐれたものがたくさんあるしね、実際に『素問』を医学技術として生かす上でですね、重要な指摘もたくさんある。ただ残念ながら、例えば、ここで言っている秘本を受得してで

すね、旧蔵の巻を破壊してしまったためにですね、王冰は後世に若干汚名を残しているわけです。第７巻として加えちゃった７篇、運気七篇といっているのは、これは『素問』の中に王冰が竄入、ごまかして中につっこんじゃった、てな言われ方をする。まあこの当時は王冰はすぐれた仕事をしたと思ったんでしょうけれども、長い時代を経てみると、時代的な評価では王冰は破壊者ということになるんですね。ただまあ、運気論というのは、僕も実際には難しいことはほとんど勉強してませんけれども、最近の中国ではですね、非常に重視しているんですね。で、『素問』の中であの運気論があるために、『素問』はより明確になったと、より臨床にね、使えるようになった、てなことをよく言われる。何で中国、社会主義国の中で何でそんなことがね……。運気論、よくわからない部分もあるんですけれども、そういう意味では、やるんなら『素問』にある運気七篇を通じて、勉強した方がいいのかな、と。

其中簡脱文斷義不相接者搜求經論所有遷移以補其處篇目墜缺指事不明者量其意趣加字以昭其義篇論呑并義不相涸闕漏名目者區分事類別目以冠篇首君臣請問禮儀乖失者考校尊卑增益以光其意錯簡碎文前後重疊者詳其指趣削去繁雜以存其要辭理秘密難粗論述者別撰玄珠以陳其道凡所加字皆朱書其文使今古必分字不雜糅庶厥昭彰聖旨敷暢玄言有如列宿高懸奎張不亂深泉淨瀅鱗介咸分君臣無夭枉之期夷夏有延齢之望俾工徒勿誤學者惟明至道流行徽音累屬千載之後方知大聖之慈惠無窮

〔和訓〕
　其の中の簡脱し、文断ち、義の相い接せざる者は、経論を捜し求め、遷移して以て其の処を補う所あり。篇目の墜缺して、指事の明らかならざる者は、其の意趣を量り、字を加えて以て其の義を昭らかにす。篇論併呑し，義の相い渉らず、名目を闕漏する者は、事類を区分し、目を別ちて以て篇首に冠す。君臣の請問の礼儀を乖失する者は、尊卑を考校し、増益して以て其の意を光らかにす。錯簡砕文し、前後重畳する者は、其の指趣を詳かにし、繁雑を削去し、以て其の要を存す。辞理秘密にして粗ぼ論述し難き者は、別に玄珠を撰し、以て其の道を陳ぶ。凡そ加うる所の字は、皆其の文を朱書す。いま古をして必ず分ち、字をして雑糅ならざらしむ。庶くば、厥の聖旨を昭彰し、玄言を敷暢すること、列宿の高く懸りて、奎張の乱れず、深泉浄瀅して鱗介は咸分れるが如くあらん。君臣は夭枉の期なく、夷夏は延齢の望あり、工徒をして誤ること勿からしめ、学者は惟だ明らかに、至道は流行し、徽音は累属し、千載の後に方に大聖の慈恵の窮まりなきを知らん。時に大唐宝応元年。歳、壬寅に次るに序す。
　まあ重要なところはさっき読んだ真ん中のところですね。やったのかということ、それを改めてですね、概括すればこういうことですね。「其の中の簡脱し、文断ち、義の相い接せざる者は、経論を捜し求め、遷移して以て其の処を補う」。脱簡したりですね、文章が途中で切れたり、あるいは意味がよく前後通じないなどのですね、いろんな『素問』の代替えになる他のですね、本を探して、その中から文章をうつしたり差し替えして、意味が通ずるように補う。それから篇目が抜け落

ちているもの、あるいは意味が明らかでないものなどはですね、字を加えてその意味を明らかにした、と。それから、篇や論がですね、一緒になっちゃっていて、意味がよく連絡とれていないものはですね、あるいは名目、名前が落っこっちゃっている、篇名がなくなっちゃってるようなものはですね、内容をよく区分してですね、それで改めて題目をつけて、それで篇の頭にくっつけた、と。それから主として問答体になっている、黄帝と岐伯との問答対話のバランスですね。岐伯が偉そうなことを言って、黄帝がへりくだったりなんかしているのはおかしいから、そういう礼儀が欠けているものはですね、改めて黄帝と岐伯というね、皇帝と臣下の関係をですね、正して、それでその両者の関係がはっきりするようにした、と。それから錯簡があったり、それから文章が、例えば板が途中で折れちゃったりね、うまくわからないような文字が書いてあったり、前後がつながっていなかったり重なりあったりして意味がはっきりしないものは、その煩雑な部分を削って、その要点だけを残した、と。それから、文字の意味がですね、隠れちゃってよくわからない、論を明らかにしにくいところはですね、別に『玄珠』という本を著して、そこにその中身は述べてある。で、その『玄珠』がないんですね。いまある『玄珠』というのは、新校正に、「詳するに王氏の『玄珠』は世に伝わる者無し」、伝わってない。「いま『玄珠』十巻『昭名隠旨』三巻有り、蓋し後人が付託の文なり」。王冰以降の人がですね、この本の名前をですね、くっつけて自分の本を出しちゃった。「雖し王氏の書に非ず。」ただし現在、「また『素問』第十九巻に至るの四巻においては、頗る発明するものあり」。後人が付託した本として『玄珠』という、『昭明隠旨』という本はあるけれども、これはその後人の付託だから、王氏の本じゃないんだけれども、ただよく中身を調べてみると、『素問』の中ですね、第１９巻から第２２巻までの運気論ですね、についての４巻分についてはよくわかりやすくですね、解説されている。発明されている。だからまあ、参考にはしなさいよ、ということをこの新校正で林億たちは言っているんですね。

このようにして王冰は次注本を作ったけれども、加えた文字は全部朱書していたんですね。赤字で書いといた。だから、王冰はどんなことをやったのかってことは、王冰の本を見た人たちはみんなわかった。そんな中で、王冰の仕事は大変ないい仕事をやっている。ところが赤字はすぐなくなっちゃってね、全部黒字になっちゃう。赤字が黒字になるのは普通はいいんですけど。全部が黒字になっちゃたために、どの部分を王冰がね、自分で加えたのかってことが全然わかんなくなっちゃった。後で最近わかってきましたけれどもね。ということでもって、もともとの『素問』はどんな文字であって、どんな内容であって、それが王冰はどんなことを、作業をしたのかっていうことが、苦労してだんだんわかってきているっていうところですね。で、学者たちでそのような余計なことをする場合は赤でやった。文字がですね、こう入り交じんないようにしたんだと、こうちゃんと書いてあるんですね。で、このようにして、唐のですね、唐朝の皇帝もすぐれた後世にですね、医学・医療にすぐれたものを、「大聖の慈恵」、唐王朝のすぐれた皇帝のですね、恵みをですね、「千載」、千年後になっても、世の中に残り伝わっていくようにしたいと、王冰は考えたんでしょう。鍼灸だけではありません、鍼灸湯液を含めて中国系医学がいまになってさらにまた発展していく可能性をたくさん秘めているのは、そんなやっぱりこの２０００年間の間にたくさんの優れた学者、あるいは医者がですね、新たに開発し新たに研究し、残してくれたおかげだと、こう思います。

こんなことをこう序文では書いてある。まだまだいろいろ内経系の医学をですね、勉強する上では、いろいろな問題たくさんあるわけです。例えば序文だって、もうひとつあるわけですね。新校正をやった林億らの序文もあるわけです。でもそれはやっているとあんまり長くなりますから。